

CIEC Newsletter

お知らせ

<2009PC カンファレンス>

2009PC カンファレンスは愛媛です！

開催日時 2009年8月9日(日)～11日(火)

開催場所 愛媛大学

※分科会発表論文応募のご案内は1月中旬予定

<会誌投稿募集>

CIEC 会誌『コンピュータ&エデュケーション』Vol. 26 (2009年6月1日発行予定)

◎締め切り 2009年2月20日

◎問い合わせ先 CIEC 会誌編集委員会事務局

◎送付先 〒166-8532

東京都杉並区和田3丁目30番22号大学生協会館

CIEC 会誌編集委員会事務局

TEL 03-5307-1195

e-mail : edit@ciec.or.jp



CONTENTS

<CIEC 研究会報告>	
・第77回研究会報告	2
<PC カンファレンス北海道2008>	
・報告	6
<2008九州PC カンファレンス in 佐賀大学>	
・報告	9
<GIoCALL2008 国際大会>	
・報告	9
<CIEC からのお知らせ>	
・CIEC 第79回研究会開催案内	11
・CIEC 第80回、81回研究会案内	
・会誌投稿募集	
・CIEC 活動日誌	

CIEC 会員状況

(2008年12月)

<個人会員 903名>
教員 668, 大学職員 18,
院生 47, 学生 7,
生協職員 84, 企業 31,
研究員 7, その他 41

<団体会員 95団体>
企業 29, 生協 58,
大学 2, 高校 2,
法人 4



CIEC ニュースレター

2009年1月9日

発行：CIEC (コンピュータ利用教育協議会)

〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22 大学生協会館

TEL 03-5307-1195 FAX 03-5307-1180

e-mail jim@ciec.or.jp URL http://www.ciec.or.jp/

(敬称略)

《CIEC 第 77 回研究会報告》

【大分大学と共催】

テーマ 子どもたちの『情報』能力育成に向けて
 (大分大学 社会人の学び直し GP 講演会 2008)
 日時 2008年10月18日(土) 13:30~16:30
 会場 (社)大分県労働福祉会館ソレイユ3階牡丹
 主催 大分大学『情報教育イノベータ』養成教育
 プログラム推進委員会
 共催 CIEC (コンピュータ利用教育協議会)
 後援 大分県教育委員会
 (財)ハイパーネットワーク社会研究所
 参加者 40名

総合司会 山下 茂 (大分大学)
 シンポジウム司会 立田 ルミ (獨協大学・CIEC)

1. 講演会 13:30~14:45
 演題『ICTで授業をどう作るか、どう注意すべきか』
 講師 赤堀 侃司 (東京工業大学)
2. 休憩 (15分)
3. パネルディスカッション 15:00~16:30
 『ICTの活用で子どもはどのように変わってくるのか』
 パネリスト
 上野 真 (大分市立滝尾小学校)
 平田 義隆 (京都女子大学・中学校高等学校)
 コメンテーター
 赤堀 侃司 (東京工業大学)
 大岩 幸太郎 (大分大学・CIEC)

今回の研究会は、大分大学が主催する「大分県における教育の情報化のための『情報教育イノベータ』育成プログラムの開発」のための講演会およびシンポジウムを、CIECとの共催で行い、まず、赤堀 侃司 氏 (東京工業大学)に、『ICTで授業をどう作るか、どう注意すべきか』とのテーマで講演をお願いした。

赤堀 侃司 氏は、最初に、今日に至るまでの ICT を利用した教育の流れを簡単に概観され、教育にコンピュータ、次いでインターネットが取り入れられた時の大きな変化について述べられたが、特にインターネットからは様々な情報が得られるため、情報をどう扱い、道具としていかに利用し、情報を活用する人間の育成が重要であると位置づけられた。

ICT を活用した授業で大切なことは、情報の提示であり、これまで、多くの国々の教育の様子を視察を通して、フィンランドであろうと、シンガポールであろうと中国であろうと、授業の基本は、情報の提示であり、教室には情報を提示できるプロジェクタが必要であると指摘された。

氏によれば、大学院などの授業では、可能な限り、最新の論文や情報を使った授業を行い、最近の2~3年以内に発表された論文を利用され、ID とパスワードの認証によって閲覧できる授業用の Web サイトに掲載し、各自がそこにアクセスして、予習をしていく仕組みで行っており、これ以外に方法があまりなく、世界的に見ても同様の傾向であるとのことであった。



更に、以前はパワーポイントなどのプレゼンテーションソフトを利用して大学院の授業を行っていたが、それは、ある問題に対する自分の考えを単に学生に伝えたに過ぎないとも言えるとされた。したがって、論文そのものなどの、1次情報を提示することで、たとえば、ある目的から方法、結論にいたるまでの論文に対して、大学院生が直接関わり合うことができるようになった。

講義や授業で教えるのではなく、勉強をして来てもらうということが重要で、各自が、勉強をして、授業に臨み、授業の中では、ディスカッションを行い、教えることから議論することへの方向にだんだん転換しているように思われるとのことである。

次に、学部の授業について紹介された。たとえば、授業に必要な資料をあらかじめ提示し、学生は、それを自分で印刷する。印刷する行為であっても、授業を聞く姿勢ができる。実際の授業の時には、学生は、手元に資料があり、教員は、同じものをプロジェクタで映す。手元に同じものがあることがきわめて重要である。なぜなら、先生の言うことはよくわからないのは、どこの説明をしているかわからないためだからである。一番重要なことは、テキストが手元にあって、今どこを話しているかをプロジェクタで大きく提示しながら指示し、アンダーラインなどを付けることである。情報の提示で重要なことは、できるだけ学生・生徒のところにある内容と映す内容が同じであることで、異なることはそれが障害となって学習が進みにくいとのことである。

小学校でも同様に、授業についてこれない生徒の場合、生徒の手元にある内容と、黒板に書いてある内容と、先生が言っている内容がすべて同期せず、すべてが異なると、負荷が生じることによって授業についていけなくなる。

また、ある説明をしている場合に、その説明をしている部分に印をつけるツールがいくつか存在するが、印を付けたときと付けないときで全く理解度が異なるとの報告もあり、このようなことは、情報提示においては、最も基本的なことだが、なかなか行われていないのが現状であるとのことであった。

更に、大学でないと通用しないかもしれないが、多人数の授業において、出席をとるために携帯を使用している。朝の一時間の授業で最も人気のない時間帯であるが、携帯を利用して出席をとった学生それぞれの名前をプロジェクタで写し、そこに自分の名前が出ることで意欲が上がり、多くに学生が意欲的に取り組んでいる事例を紹介された。

ただ、現在の教育再生会議などでは、小中学生には、「ケータイを持たせるな」との議論が主流となっているため、この事例は、小中高등학교への応用が、なかなか難しいと考えられる。しかし、すべての道具には、必ず良い面と悪い面がある。ケータイは、既に日本中、世界中に広く普及しているため、なくなるはずはない。誤った使い方によっては、とんでもないことになるが、もう一方では、非常に有益な便利な使

い方も多いことは事実である。したがって、いかに正しく利用するかを教育の中から考え、正しい利用方法を共通に考えていくことが大切である。そうでなければ、教育とツールとの関わりは論じることさえできないと思うが、小中学校では、現段階ではケータイを禁止することは構わない。たとえ禁止しても、禁止するだけではなく、有効な使い方を常に模索することを是非行って欲しいと話された。

また、最近の国際会議での報告で、過食症が増えている小学生が多く通うスペインの小学校の先生の発表の事例から、インターネットを利用して、自分がどのように過食症になったか、あるいは、自分がいかに過食症を克服したかなどを互いに書き込むことで、子ども同士がコミュニケーションをとりながら過食症を減らしたという例を紹介された。

日本では、インターネットの世界に対する考え方として、たとえば、情報モラルについて、モラルがなくなったからモラルをきちんと教えて防ごうという考え方が主流であろう。自分たちがそのようになってしまった理由をインターネットが悪いということではなく、インターネットを逆に利用し、コミュニケーションをしながら、よく知ることで、過食症というものをコントロールできるのではないかという発想である。

道具そのものに善し悪しはなく、このように利用すれば過食症になる。別の使い方をすれば、過食症を防げるかもしれない。メディアと教育の関係としては、既に教育に取り入れられているメディアをどのように受け止めるか、いかに利用するかが今求められている。ケータイも同じではないだろうかとされた。

たとえば、100名の受講生のいる授業で、自由に発言や質問ができるだろうかと疑問を投げかけられ、学生はすばらしいアイデアを持っていたとしても、100名の中で、手を挙げられるのは、よほど自信がある場合などではないだろうか。日本の社会では、手を挙げて発言した場合に、周囲の視線を気にする。このような社会の中で、挙手をして何らかの行動を起こすことは、バリアの高いことではないか。しかし、ケータイで、質問を出すような仕組みにすることで、ある種の匿名性により、すばらしい質問も多く出てくるようになり、これを重ねることによって、次第に、ケータイを利用しなくても質問などが出てくるようになる。基本は、一人一人とインタラクティブにやりとりをすることが必要だが、大人数の場合にはきわめて難しい。そのための手段としても考えられると思うとのことであった。

道具はきっかけである。よく心配されることは、道具を使うと道具に依存するのではないかということ。確かにそのような面もある。しかし、それをきっかけと考えたらどうか。この考えには反対の人も多いが、たとえば、ICTを薬だと考える。この世の中には健康な人ばかりがいるわけではなく、誰もが風邪をひいたら薬を飲む。少しの薬の助けによって、気分はよくなる。同様にケータイの助けによって、自分の意見を言ってみたい。薬がなくなっても健康体になれるかもしれない。すべての人々が健康体であれば、全く何の問題もなく、ICTなどを利用する必要もないということである。

次に、電子黒板の利用に言及された。電子黒板では、子どもが、跳び箱やマット運動をする様子をデジタルビデオで撮影し、運動を終えた数十秒後には自分の姿を見ることができるとのこと。また、倒立したときの角度などを書き込めることなどはすばらしく、書き込めることが非常に重要で、電子黒板の一

番の良さは、映すことではなく、そこに書き込めるということであり、最近、非常に注目されている。

最近の論文の事例で、小説を読むときにはアンダーラインを引かない。小説を読むときは楽しんでいただけである。しかし、学習はこれとは異なり、単に脳を意味もなく右から左にすり抜けていってしまっただけでは意味がない。人は、重要と考える内容などをメモしたり、アンダーラインを引いたり、○をつけたり、印をつけたりということを行う。たとえば、教科書を読んだときに、「ここがわからない、ここが重要だ。」というようにテキストと自分の脳が対話をしていると感ぜられること、対話しながら理解を進めていることが重要で、それをなんらかの形で表現するのがアンダーラインなどではないかとのことである。

更に最近の研究として、文部科学省の委託を受け、北海道の学校から種子島の学校に至るまで、小学校6校、中学校5校、高等学校1校の合計全国13の小中高等学校に「ニンテンドーDS」を貸し出して学習成果を調査された成果を中心に話していただいた。630台のDSを利用して調査をしたところ、朝学習に利用することは、非常に効果あるとの結果を得られたとのことであった。

その研究では、成績の優れている生徒とそうでない生徒の一番の差は、休憩時間などのきわめて短い時間をいかに活用するかということも重要な要因であり、習熟度に対応できることもコンピュータの特性である。また、朝学習を行うことで、学習の構えができ1時間目の授業に入りやすくなるなどの効果もあったとのこと。

また、あらゆる面で基礎学力は必要であり、たとえば、ある文章の60%以上の単語がわからなければ、文章を読むという持続性は無理である。したがって、基本的な単語を覚えさせないと授業は成立しない訳である。DSは、使える道具だということが判明したが、問題は持続性で、脳科学的なアプローチも試み、前頭葉について調べた結果、個人差はあるもののDSを使って学習したグループはそうでないグループに比較して集中して学習しているとのことである。

課題は、飽きること。どんなメディアを使っても必ず飽きてしまう。DSでもプリントでも様々なメディアでも同様であり、脳の血流量を測定すると、新しいメディアの方が必ず最初は、脳が活性化するが、いつか飽きてくる。つまり、前頭前野の活動が活性化しなくなる。それは、道具が良くないと考える方もいるが、飽きてやらなくなる生徒と習慣化される生徒がいることがわかった。習慣化される生徒は、非常に伸びる。前頭葉は活性化されていないけれども習慣化される。習慣化されて、持続する生徒は、非常に伸びるとのことであった。

次に、『ICTの活用で子どもはどう変わってくるのか』とのテーマで立田 ルミ氏の司会により、パネルディスカッションが行われた。最初のパネリストとして、上野 真氏（大分市立滝尾小学校）から、話題提供をしていただいた。

上野 真氏は、「子どもが楽しい、自分も楽しいICT活用」と題して、普段している実践と、そこでの子ども様子を中心に報告された。現在、学校現場では、「IT新改革戦略」に基づいて、「教員のIT指導力の評価等により、教員のIT活用能力を向上させる」ことに取り組んでいるとのこと。この報告では、ご自身の日常的なICT活用方法や、「自分も楽しい！」と思えた活用と、計画的な活用方法では、授業実践や研究授業等での実践を中心に話していただいた。

まず、小学校の教室における ICT 環境は非常に厳しいため、自費で、実物投影機能のあるマルチプロジェクタとホワイトボードの機能がある黒板に貼れるマグネットスクリーンを購入され、日常的な ICT 活用方法の一つとして、「学級開きの自己紹介」「漢字テストの結果発表」「学級の思い出スライド」などを行い、学級経営にほんの少しの潤いを出されているとのことであった。

「学級開きの自己紹介」では、子どもたちといかに信頼関係を作るか、子どもにいかに安心してもらうかが非常に重要であるので、ICT を活用し、プロジェクタを利用して、おもしろく自己紹介を行うことで、信頼関係を築くことができると考えていると紹介された。

「漢字テストの結果発表」では、あいにく DS がないため、紙での漢字テストを行っているが、子どもたちの意欲を高めるために、結果発表をプロジェクタ利用で行われているそうである。具体的には、前のテストからどれだけ成績が上がったかを本人の同意を得て載せ、漢字が苦手な子どもほど、がんばるので、名前が載る可能性が多く、見せることで拍手がおきる。もちろん満点だった場合にも連続チャレンジャーということで見せる。更に、クラスの目標点を最初に決めておいて、これをみんなががんばって超えたら達成パーティーをしようということをする。合計点の出し方にも工夫をしている。自分の名前が載ることや、達成したときには、うれしいようで、子どもたちは漢字テストが非常に好きとのことであった。

「学級の思い出スライド」の場合は、子どもたちから、学級の思い出スライドのようなものを作りたいと言い出し、作成することとなり、普段から撮りためてある何百枚も写真から、子どもたちが自ら選び、みんなの顔を並べて4月から順に作成して、自分たちで作詞をした歌を歌いながら終わるということを行われたとのこと。

このように、学級のはじめと終わりにこのようなものを少し入れるだけで、子どもたちとの良い繋がりができるのではないかと感じ、ほんの少しの ICT 活用であるが、伝えたい思い、子どもたちが伝えたい思いを伝えやすくする。わかりやすくする。このような暖かさが ICT にはあるのではと思うとまとめられた。

更に、自分も「楽しい!」と思えた活用事例として、基礎基本の定着を目指して日常的な授業実践とのことで、授業に必要なプリントや提示資料を作成するために、ワープロソフトやプレゼンテーションソフトなどを活用することを紹介された。

基礎基本の定着（国語）として、漢字テストでは、エクセルを利用して、年々改良を加え、データに漢字を打ち込むと、漢字テストができ、下のほうに解答もついているものを生成し、印刷ボタンを押せば、自動的に次々と漢字テストを作成できるマクロを作成されているとのこと。また、読みと漢字が結びついていない子どもには、そのデータを用いて「読みフラッシュ」をすることで、自然に読みが出来るようになったそうである。更に、読み50音テスト、50問は多いので覚えきれないという子どもには、10問テストを繰り返すようにきめ細かく対応されているとのことであった。

このような取り組みによって子どもたちが、自信を持って漢字の学習に取り組むことになり、前述の「漢字テストの結果発表」が楽しみになってくる。また、このようなエクセル

のファイルもセキュリティに配慮しながら教材のサーバや USB メモリなどに入れておいて、多くの先生方に活用してもらいようにしているとのことである。

基礎基本の定着（算数）では、学校現場でよく見られるのは、FAX 問題集をコピーして印刷するということであるが、問題数が少ないことが欠点であるので、ランダム関数によって毎回数字が自動的に変化し、作るたびに異なる問題が生成されるものを作成されたとのことである。

学習に対する児童の興味・関心を高めるために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する実践例としては、4年生の地理において、都道府県名も覚えてもらうために都道府県パズルを行い、盛り上がって、その後、通常授業に入るといった方法をとられたとのこと。

また、算数でも ICT をよく使うものの、授業の中では、あまり使用せず、導入とまとめに使い、たとえば、大きな数のまとめに、どうしても大きな数が読めない子どもがいた場合には、大きな定規を用意して目盛りも一緒に数えながら考える。わからない子どもが前に来て、指を指すと一緒に同時に変化させていくようにすることで、その子も一緒になって活動ができる。手元にあるのと一緒ということは重要で、たとえば、2年生の算数において、算数セットをデジカメで撮影して、その画像を手元の算数セットと同様に動かせるようにして、数を数えるように工夫されているとのこと。

理科では、教科書には一般的な河川の記述があるが、子どもたちの身近なもので、大分川と大分市のハザードマップを元にして、教科書に記述されている洪水などというものが自分たちの身近なところで起こりうることを理解してもらうようにしているとのこと。このように ICT は楽しい授業作りを助けてくれると思うと話された。

また、現在、「デジタル掛図」が、大分市内の小学校にすべて導入され、大分市内の先生方に是非使っていただいで、広めたいと考えられているとのこと。実践事例としては、少年自然の家で源流探検において源流を見学したものの、上流から下流までをすべて観察するのは難しい場合などの利用例を示され、このような場合には、思考力、判断力、表現力等の育成のための学習活動が行われ、授業を分析・評価し、論述することができたとのことである。

ICT は、万能のツールではないが、授業に「躍動感」と「わかりやすさ」を加えてくれるものであり、また、ICT には、あたたかさがある。このあたたかさによって、子どもたちは、安心して自分の力を発揮できる場となる。楽しい授業になれば、学習意欲の向上や学習習慣が確立され、わかる授業を実現することで、基礎的な知識・技能の習慣ができる。楽しい授業になり、わかる授業ができれば、子どもたちが面白くなる。そのような現場を見ることで、教師自身も更に ICT を活用したいと考えることが ICT の活用だと思うとまとめられた。

次に、平田 義隆氏（京都女子中学校高等学校）から、「中学校数学における ICT を活用した授業の試み」と題して、話題提供をしていただいた。2007 年度中学 2 年生の授業において、ICT を活用した数学の授業の展開において、その試みの内容や生徒の反応、成功例や失敗例など交えながら 1 年間の授業について報告された。

Council for Improvement of Education through Computers

教室の設備については、校舎が非常に古く、黒板に磁石が付かないため、試行錯誤の結果、「貼ってはがせるホワイトボード」を利用されたとのこと。パソコンについては、自前のB5サイズのものを用意して、授業ごとに教室に持ち運んで使用されたとのことであるが、ICTを活用することで、これまでの授業運営と非常に大きく変化した点をいくつか紹介された。

毎回の授業で、授業の導入部分において、5分程度の「フラッシュ暗算」を行われとのこと。この目的は、いまから数学の授業が始まることに対する意識付けであったが、授業のはじめ生徒たちが必ず黒板の方を向いて授業に望む姿勢ができるので、とても役立ったと感じられているとのことであった。生徒による授業評価においても、非常によい評価を得たとのことであった。

また、PowerPointのスライドのページをめくるために「ワイヤレスマウス」を用いた結果、授業についていくのが困難な生徒やプリントに書き込みをするのが遅い生徒などに付き添いながら授業を進めることができ、これまでよりも、多くの生徒に目を向けることができたとのこと。これまで、なかなか数学の授業では、難しいと思っていた机間巡視が、ICT機器の利用によって実現したことは、授業そのもののとらえ方を大きく変えるものであったとのことである。

また、別の観点では、黒板で授業をする場合、チョークの色に制限がある（白、赤、黄、青）が、PowerPointのスライドを用いることによって、これ以外の色を使用し、よりわかりやすく伝えることができた結果、理解度を上げるのに大きな効果を発揮したのではないかと感じられているとのこと。

更に、図形分野については、スクリーン上で様々な図形を動かす、板書するには若干困難な図形であっても、わかりやすく移動させることもでき、わかりやすいように色を加えることも容易であることから、PowerPointのスライドの制作には多少時間がかかるものの、生徒たちの反応を見る限り、ICTを用いて授業を行う価値はあったように思われたとのこと。

また、ICTを活用した授業を行ったにもかかわらず、効果が出ず、利用しない方がよかった点がいくつかあることを紹介された。

一つには、これまで、基本的に教室でICT機器を使用した授業を行っていない学校であり、特に、数学でこのような形態で授業を行うことが非常に珍しいために、使い始めた当初は、授業の内容はそっちのけで、ICTを用いて授業をしていくこと自体に生徒がワクワク・ソワソワで、集中もできない状態が続いてしまったとのことであった。

また、もう一つは、ICTを活用する授業を展開し始めてから、生徒の成績が下がってしまったとのこと、1学期から2学期中間考査までICT機器を使用して授業を展開してきたが、思うように成績が上がらないために、2学期後半は、ICT機器を封印し、これらは一切使わない授業を約2ヶ月間実施したところ、2学期期末テストでは、以前よりやや良いぐらいのレベルにまで回復したとのことである。

これらの結果は、一見、ICT機器を使用しない方が良いかのようにも思われるが、生徒たちによる評価によれば、通常の授業と比較して、興味関心、楽しさ、内容や説明・授業の

ポイントのわかりやすさのすべてについて9割以上の生徒が肯定的にとらえているものの、7割強の生徒が「分量が多く進んだ」と感じており、実際はそうでもないにもかかわらず、そう感じているということが分かった。難易度については難しく感じた生徒と、易しく感じた生徒がほぼ半々であったが、「得意になったような気がする」と答えた生徒や「いつもより理解できた」と答えている生徒が7割以上いたと話された。

ICTを活用した授業では、準備をすればするほど、授業がスムーズに進み、生徒たちはそれを進度が速くなったととらえているが、逆に、理解度等については非常に高い評価があり、先ほどの、「試験の点数が上がらない」と合わせて考えると、単によく分かったような気になっているだけではなにかと思われると分析された。

今回、この授業を行ったクラスは、文型の生徒が大半で、こういった生徒たちへの数学教育に必要なことは、「基礎学力の定着」であると考えられているとのこと。具体的には、「授業を理解させること」と「その理解を持続させること」であると思うとされ、ICTを活用した授業で前者については大きく意識していたと思うが、後者については少しおろそかにしていたのではないかと感じられているとのことであった。

今回のICTを活用しながら授業を構築していく中で、これまでの授業形態や授業そのもののあり方を見つめ直す大きなきっかけとなり、この結果を踏まえて、本当に分らせることをもう一歩踏み込んで考えなければならないと感じられたと報告された。

以上の話題提供に関して、次のようなディスカッションが行われた。

はじめに、ディスカッションから参加した大岩幸太郎氏より、4枚のショベルカーの起承転結画像が提示され、「これで何を言っているか分かりますか」との質問があった。（会場の参加者の多くには不明だった。）氏は、提示内容を工夫することで、児童・生徒の能動的な思考力を求めることも出来ることを示したかった。



ICT利用による動機付けや学習効果と成績との関連について、プレゼンテーションソフトウェアの利用では、学生は、理解できたような気になり、逆に学力が低下することは、確かに指摘されているが、理解できた気になることも重要であり、また、定着するためには、反復練習も必要かもしれないとの意見に対して、

上野氏より、わかった気になるのは、良いことではないかと考えている。しかし、そのまま授業を進めるのではなく、実際の実践では、導入部分にICTを活用し、子どもたちが関

心を持つ部分で終わらせたなら通常の授業を行っている。ただ、授業に必要な部分的な画像やアニメーションについては、別に考えてられているとのことであった。また、反復練習は、必ず必要であるので、紙ベースで欠かさず一緒にやっていくように心がけていると回答された。

また、平田氏より、中学校や高等学校の場合、特に「特別進学クラス」などにおいては、結果として、成績が偏差値に表れるため、ICTの活用がまだまだ難しい面もあり、授業と関連する宿題をこまめに行わせることで効果が出るとのこと。ICTの活用は、導入の部分には非常に有効だと考えているので、そこで使うようにしているとのことであった。

また、学生が、主体的に授業の場で自ら考えることの授業を実現することが大切に思える。考えることや考えを深めるところと一緒に経験できるとおもしろい授業になり、自分で、またやってみようと思うようになる。その結果、自分が違ってくことで、「学び」や「勉強のおもしろさ」を感じられるとよいと思っているなどの意見が出された。

次に、学校現場には、子どもが理解できない場合には、子どもが悪いという先生もいるし、大学においても、教員の教え方の問題ではなく、学生のレベル下がってきていると簡単に言ってしまう場合がある。当然のことかもしれないが、基本的な姿勢として、成績が伸びないのは、自分のやり方に問題があるという考え方について、詳しく話して欲しいとの意見が出された。

この意見に関して、上野氏より、ほとんどの先生がそうであるが、子どもの力が伸びたときには、子どもの力であると考え、子どもがうまく伸びないときには、先生にも問題があった、責任だと思わなければならないと思うようになりたいと心がけられているとのこと。何か子どもたちにできないことがあれば、子どもたちに聞き、良くない部分について、解決策を探るように努めることが大切であり、特に小学校の段階では、有効なのではないかと考えられているとのことであった。



また、平田氏より、最近では、以前と比較して、できなくなっていることが多いと感じている。たとえば、大学において、高等学校の教科「情報」の教員免許に必要な科目として「情報科教育法」の授業を担当しているが、コンピュータ教室で講義をした場合には、授業支援システムのモニターなどから、授業中に学生が勝手に mixi などにアクセスしている様子を観察できる。しかし、コンピュータのない小さい教室でプロジェクタを利用して、授業を行ったところ、よく聞くようになった。決して、悪気があってしているのではないことがわかる。目の前に非常に興味のあるもの置かれて、触れないと言われても子どもはがまんできないのと同じではないかと思う。最近の学生は、以前より、子どもだと感じていので、その年代に応じた学習環境を考える必要があるのではないかと

と話された。

また、この後、ICTを使った授業をということで取り組んでいる学校もあるが、必要なハードウェアが整備されていない。以前は、情報機器を使えばよいということが言われた部分もあったが、最近では、誰もが利用できて、効果があるものを見極めていこうという動きが多くなってきている。利用できる機器、みんなが共有できる仕組みなども含めて何もかも不足しているのが現状であるので、これを変えていく必要があるとの意見が多く出された。

最後に、主催された大分大学教育福祉科学部の大岩幸太郎氏よりICTを取り巻く環境は、大分県の状況を見ると、他県に比べ厳しい現状があり、その中で、情報教育をイノベーションしていく人を育成していくためにも、このような研究会に積極的に参加される先生方を中心として、大分県の情報教育が少しでもイノベーションされ、それが大分県を中心とした児童・生徒達の勉強を通して、豊かな生活や人間性につながっていけばと願っていると話され、基本的には、ICTの活用や情報教育をどのように行うことが正しいのか、まだ、答えがなく、道具の使い方の問題点など、容易に解のある問題ではない。日本の国の成り立ちを考える中で、21世紀がグローバル競争社会であり、知識基盤社会であることも考えると、教員が小学校、中学校、高等学校の頃からICTを活用している姿を子どもたちにみせることが、21世紀を担っていく子どもたちにとっても、良い意味での刺激にもなるのではないかと思う。現在でも子どもたちは、ケータイを使いこなしているが、このような情報ツールを正しく使いこなすのがあたりまえになっていくことが望ましいのではないかと。予算の許す限り、このような会を開催していきたいとの考えが示された。

(鳥居 隆司 相山女学園大学・CIEC)

PCカンファレンス北海道2008 報告

昨年度は「2007PCカンファレンス」が北海道で開催された関係で、一年間お休みとなった「PCカンファレンス北海道」ですが、今年はCIEC北海道支部設立後はじめての「PCカンファレンス北海道2008」が、11月15日(土)～16日(日)の2日間、室蘭工業大学で開催され80名を超える参加者がありました。

1 開催概要

- (1) 開催日時 2008年11月15日(土)～16日(日)
- (2) 開催場所 室蘭工業大学(室蘭市水元町27-1)
- (3) 開催テーマ 情報技術を利用した
教育におけるタテの絆
- (4) 主催 PCカンファレンス北海道2008実行委員会
- (5) 共催 CIEC(コンピュータ利用教育協議会)、全国大学生協連会北海道地域センター
- (6) 後援 室蘭市、室蘭市教育委員会、登別市、登別教育委員会、伊達市、伊達市教育委員会、北海道新聞室蘭支社、室蘭民報社、NHK室蘭放送局、室蘭工業大学

2 初日 (11月15日)

2.1 IT フェア

「PCカンファレンス北海道2008」の始めに、室蘭工大の食堂で13社によるITフェアがスタートしました。PCカンファレンスの参加者の他に、土曜日の昼食を取りにきた教職員らが興味深げに展示を見たり、担当者に質問や要望をする姿がみられました。



2.2 分科会

分科会は論文15本の応募があり、それぞれ活発な質疑応答がなされました。

2.3 IT プレゼン

多目的ホールでは以下の企業による「ITプレゼン」が行われ、大勢の聴衆がありました。



- (1) NTT データ北海道
「学外環境からのWeb履修システム導入レポート」
- (2) ソニーマーケティング(株)
「ハイビジョン画質で遠隔講義が変わる」
- (3) 富士通株式会社
「Windows Mobile 6 Standard を搭載した携帯電話「Windows ケータイ FOMA F1100」」

2.4 イブニングトーク

以下のテーマで和気あいあいとしながらも活発な意見のやりとりがありました。



- (1) 一杯やりながらレゴで遊びませんか?
- (2) 教育システム(見学会)
- (3) 教育モラル: 学校現場はどうする?

3 二日目 (11月16日)

PCカンファレンス北海道2008・刀川 眞実行委員長(室蘭工
CIEC Newsletter, No.48 January 2009

業大学)の挨拶から二日目のプログラムがスタートしました。

3.1 ポスターコンペ表彰式

「PCカンファレンス北海道2008」のポスターは室蘭工大生によるコンペにより選ばれました(応募総数9点)。PCカンファレンス北海道2008・刀川 眞実行委員長から以下の賞がそれぞれデザインした学生たちに与えられました。

- グランプリ: 本間 友理(ほんま ゆり)
- 準グランプリ: 小野寺 碧(おのでら みどり)
- 特別賞: 山本 泰之(やまもと やすゆき)

3.2 特別講演

「子どもたちを取り巻くネット環境とその実態」と題し、安川雅史氏(全国webカウンセリング協議会理事長)に講演をして頂きました。具体的な事例を交えてプロフィールサイトや学校裏サイトの根深い問題についてご紹介いただきました。



「プロフィールサイトの問題」:

子供たちにとってのプロフィールサイトは出会い系サイトである。小学生は下着、裸の写真、局部の写真を載せたりする。ロリコン系の大人は出会い系サイトを使っても自分の好みの子を見つけられないが、プロフィールサイトでは簡単に見つかる。出会い系サイトは履歴が残り警察が検挙しやすい。そこでプロフィールサイトを使う。サイトの外でお互いのアドレスを使って接触。監視カメラがあるのでラブホテルは使わない。駅の近くの通常のホテルで親子の名前で予約する。

問題は大人がまったく子供たちについていけない点にある。こどもはアクセルしかふんでいない。出会い系サイトは警察が把握できるが、プロフィールサイトはつかまらないからいっそう危険である。プロフィールサイトで知り合った人間の危険性を大人が知らせる必要がある。最悪の事態にならないければ問題が発覚しない。

学校裏サイトの問題:

掲示板に書き込みをされた場合、それを見なければいいという問題ではない。自分が見なくても世界中で見ている。ふだんは学校で真面目な子が、ネットの世界では悪人になることもある。学校の指導が一步まちがうと、命に関わる問題。

裏サイトの削除依頼:

管理人に連絡して削除できる裏サイトとそうではないものがある。対象となるURLを書いていないと削除はできない。漠然としたものは削除してもらえない。明らかに個人名が出ている場合など具体的なものが削除対象となる。教員ほどだからだと文章を書くので無視されやすい。念には念を入れて自分の名前を出さない。全国版の裏サイトは数時間で削除される。管理人には記録を残しておいてもらうべき。個人がとっておいたコピーでは警察が信じない場合もある。

現在では、携帯さえあれば、大麻、覚せい剤、タバコも簡単に手に入る。アメリカの場合、携帯は通信の手段。ネットはパソコン。韓国では、未成年がフィルタリングはずしたら

罰則となる。

携帯を止めさせようとする、子供たちは言い訳が上手である。音楽ダウンロードができなくなるなどの理由を訴えてくる。フィルタリングをかけたなら子供が一言も口をきいてくれなくなったから、フィルタリングをはずしたなど。親が子供の顔を伺っている。これは本当の親子関係ではない。

家庭内でルール決めをして：

家庭内での会話が成り立っていないことが問題。親にも相談できずにいることが問題である。

3.3 シンポジウム

上記講演を受けて「児童・生徒の生活に入り込む形態への対応 求められる学校・家庭・社会の取り組み」をテーマに以下のパネラーによるシンポジウムが開かれました。



パネラー

安川雅史氏：全国 Web カウンセリング協議会理事長

田中眞澄氏：株式会社NTT ドコモ北海道支社

ケータイ安全教室事務局

吉田則彦：室蘭東翔高等学校教諭

司会

高瀬敏樹：札幌旭ヶ丘高校

高橋氏のコメントに続き、田中氏、吉田氏からそれぞれの取り組みについて紹介していただき、安川氏からコメントを頂戴しました。

(1) 田中眞澄氏：ケータイ安全教室の取り組み

「ケータイ安全教室」実施に至る経緯

平成16年に全国に先駆けて実施した。当初はワンギリなどがはやったことがきっかけ。その後、平成16年から20年にかけて増加傾向にある。本取り組みは販売には関係なく社会貢献事業として実施している。稚内から根室まで北海道内全域を対象としている。

ネットトラブルにあう子どもたち：

全体の事件の6割以上が中学生である。中学校311人、高校535人。実際にはもっといるはずだが、被害届をだしていない。中学生の女子に被害が集中している。被害の内訳は以下の通り。

架空請求メール、フィッシング詐欺誘引メール、ワンクリック詐欺、芸能情報によるアドレス収集などなど。

フィルタリングサービスについて：

ブラックリスト方式、ホワイトリスト方式がある。ブラックリストは有害サイトをブロックする。ホワイトリストは特定の決められたサイトに限定してアクセス可能とする。小学生はホワイトリスト方式にしてほしい。

ほかに時間制限機能があるが、これはドコモのみのサービスである。フィルタリングサービスは5年前からあるが、使っている人は少なかった。未成年には来年の1月から強制的にフィルタがかかる。フィルタリング利用者は過去1年で倍増した。

加害者への第一歩：

書き込みなどが犯罪に発展した事件がある。匿名だからと気軽な気持ちで悪質な書き込みをすると、ネット上では記録が残る、犯罪として逮捕されることもある。フィルタリングサービスを活用してほしい。

(2) 吉田則彦氏：室蘭東翔高等学校教諭

現在の学校に来て13年目。来た当時の生徒はクラスの4分の1の生徒がポケベルを持っていた。当初の相談。通話料が高くて困るという相談。多機能になるにつれて、トラブル相談の内容が変わってきた。生徒の使い方によるトラブル。軽い気持ちでの書き込みからのトラブル。気軽にクリックして変な請求。親にも言えず、担任にも言えずという問題を相談されることもある。

通信手段としての便利なツールを手に入れたかもしれないが、コミュニケーション能力の基本的な部分が足りない。同じ校内の生徒間のトラブルの例。そのつもりでは送っていないが、相手は誹謗中傷と受け取った。両者の話しを聞いて解決。他校の生徒によるなりすましで、身に覚えのない品物が届いたこともある。

感覚を研ぎ澄ますことの必要性を感じる。生徒が困っていることに速やかに気づくこと、相談できる環境をつくる必要がある。今後、どのような問題が起きていくのが不安である。

(3) 安川雅史氏：全国 Web カウンセリング協議会理事長

北海道も全国的に見ても起こっていることは変わらないと思った。子ども達は危険を漠然と言われてもわからない。これからの先生達はいままで以上に大変。年配の先生たちは大変。わからないからと他の先生にふってしまうとまずい。この先生には相談できないとわかると、子供たちは相談しなくなる。様々なケースがある。チェーンメールの例では暴力団の山口組を名乗ったメールがはやっている。ケータイの動画機能を使った例では、中学校のトイレで男子生徒の下半身をケータイメールで撮影しチェーンメールで配信した。だがサブアドレスを使って送信したので配信元がわからない、などといった例がある。

教師が生徒に携帯番号を教えるのも問題である。問題がある子供から夜中に電話。「薬を飲んだ」、「手首をきった」というメールが届く。教員を24時間365日やるつもりにならなくてはならない。

まとめ

その後、会場の参加者と活発な質疑応答を行い、最後にパネラーから一言ずつ頂戴しました。

安川氏：

親が子どもに関心を持つことが大事。ケータイの明細書を見ること。定額制で安心しているが、ネットの接続料が100万円を超えている子供もいる。有効な使い方を教えるべきである。

吉田氏：

親と子、教師と生徒、親どうしの基本的なコミュニケーションをとることが必要であると改めて感じた。

田中氏：

トラブルは日々変わっている。マナーも変わっている。病室からもケータイ電話が使えるようになった。その一方、そのうちに交通整理がされるのではないか。子供の安全を守るためにみんなで協力していければ、と思う。

(文責：曾我聰起)

2008 九州 PC カンファレンス in 佐賀大学 報告

本年度の九州 PC カンファレンス（以下 PCC）は、11 月 22 日、23 日の 2 日間にわたって、佐賀大学を会場に行われた。今回のテーマは「e ラーニングで変わる学校教育～小学校から大学教育まで～」であり、1 日目の基調講演・シンポジウムの内容は概ねこのテーマに沿ったものであった。



まず、基調講演ではメディア教育開発センターの小野博氏が「小中高等教育とオンライン学習大学ネットワーク」と題して、日本の大学における e ラーニング研究実践の現状について、大学教育への本格導入が容易に進まない原因を考察し、同時に今後 e ラーニングが果たすべき役割について問題提起された。特に、大学生の全般的な学力低下に対する支援策として、メディア教育開発センター(NIME)が中心となって、いわゆるリメディアル学習教材のオンライン化を促進し、インターネットを介して各大学がそれぞれのニーズに応じて共同利用できるようにする構想が提唱された。また、すでにこの構想は具体化され、Moodle 上で動く UPO-NET コンテンツが 2009 年度から本格的に供用開始される（現在は試験運用段階）ということも紹介された。

続いて行われたシンポジウム「e ラーニングで変わる学校教育」では、冒頭、佐賀大学が全国に先駆けて進める e ラーニングコンテンツ制作のための環境整備事業の概要紹介が行われた後、初等中等教育の現場からのオンライン学習ならびに ICT を活用した授業、課外活動の事例報告がなされた。次に、参加者との質疑応答を交えて、e ラーニングを導入することの効用のみならず、従来型集合教育と e ラーニングをどのように組み合わせるのか、現実には学校行事や教科内容をこなしていくだけで精一杯な状況でいかにして e ラーニングをカリキュラムに取り込んでいくのか、といった問題点についても活発に議論された。

2 日目の分科会は 2 つのセッションに分かれ、1 日目の全体会テーマに関連したオンライン学習コンテンツの制作、ならびに英語・数学・物理・化学などのリメディアル教材の開発状況についての報告にとどまらず、中学生と大学新生各レベルのオンライン学習方式によるタッチタイピング練習の教育的効果、ICT を活用した情報リテラシー教育、情報倫理教育、地域活性化支援、小中高大連携プログラムの実践事例など多彩な研究発表がなされた。



当初開催予定であった大学の辞退に伴い、実質 2 ヶ月余りという準備期間しかなく、参加者の確保が困難ではという予想もあったが、延べ 100 人を超える参加者が白熱した議論を戦わせ、盛況のうちに 2 日間の PCC は幕を閉じた。なお、次年度の開催予定地は未定である。

(文責 上村隆一)

GloCALL2008 国際大会参会記

野澤和典（立命館大学）
小張敬之（青山学院大学）

いずれもアジア太平洋地域での CALL 研究の推進をしてきている APACALL (<http://www.apacall.org/>) と PacCALL (<http://www.paccall.org/main/index.php>) が年次大会として共催した *GloCALL 2008 - Indonesia: Globalization and Localization in CALL* (<http://www.glocall.org/>) が去る 11 月 7 日～9 日と 11-12 日にインドネシアのジャカルタとジョグジャカルタの 2 カ所で開催された。筆者たちは学期中での海外出張でもあり、諸事情によりジャカルタ大会（写真 1：会場となったシプトラホテル）にのみに参加した。今回の研究発表は、CIEC 国際交流活動委員会および外国語教育研究部会の 2008 年度企画から支援を得たもので、二人の発表は CIEC-Sponsored Presentation としてなされた。アジアを中心に世界各地より約 60 名の参加者があり、インドネシアで幅広く CALL 事業を展開している民間会社ではあるが、CALL システムとソフトウェアの普及推進に尽力をしてきており、今国際大会の主たるスポンサーとなった HL(Higher Learning) 関係者や地元の教員を中心に 150 名ほどが加わり、200 名を超える参加者による国際大会となった。



写真 1：大会会場となったシプトラホテル

大会プログラム概要

招待講演者は 4 名おり、北米より CALL 研究者としてリーダー的存在である Dr. Phil Hubbard (Stanford University, U.S.A.) Dr. Debra Hoven (Athabasca University, Canada)、アジアからは Dr. Wei Meng Chan (National University of Singapore, Singapore) と地元のインドネシアから Mr. Indra Charismiadji (President of Higher Learning) という 4 名で、2 日間にまたがって、それぞれ CALL の最新情報を提供してくれた。大会プログラム（写真 2）および開会式の一部（写真 3）を参照されたい。



写真 2：大会ハンドブック



写真 3：開会式の一部

Council for Improvement of Education through Computers

第一日目は、一般参加者へオープン・ワークショップ 2 つ (Introduction to CALL, CALL Practice) があり、地元の教員たちへ無料研修が提供された。

第二日目は、通常の大会プログラムとなり、開会式のあと、招待講演会 1 (Charismiadji: CALL Implementation in Indonesia - Yesterday, Today, and Tomorrow) があり、休憩後、6 つの分科会会場に分かれ、同時進行の口頭発表があった。我々の口頭発表 (野澤: Does Blended Learning Really Work? - Pros and Cons of Using Moodle as an Educational Tool; 小張: How to Integrate ICT in TEFL in Japan?) もその中で行われた。



写真 4: 左-K 氏、中-小張、右-野澤

昼食後は、招待講演 2 (Hoven: Individuals, Community, Communication and Language Pedagogy) があり、その後 5 時過ぎまで分科会が開催された。第二日目を締めくくる懇親会は、会場となった著名なレストランまで貸し切りバスで移動したが、ジャカルタ特有の交通渋滞のため、1 時間半もかかって到着した。インドネシアの伝統的な舞踏とパティック (ろうけつ染め) の衣装によるファッションショーと美味しい料理でもてなされた。帰路は交通渋滞も少し解消され、1 時間ほどでホテルに戻れた。

第三日目は、初めに招待講演 3 (Hubbard: Integrating Learner Training into CALL Classroom and Materials) があり、午前中の分科会が提供された。昼食後も招待講演 4 (Chan: Harnessing Mobile Technologies for Foreign Language Learning - The Example of Podcasting) があり、その後も分科会があった。

以上 3 日間の研究発表などで各発表者が利用したパワーポイントや pdf ファイルは、必ずしもプレゼンター全員がアップロードしていないが、大会ホームページよりダウンロードできる仕組みになっており、大会へ参加できなかった者でも関心のある発表内容についての資料を入手できる。

今大会の特徴は、CALL 研究の最近の傾向を反映したもので、Blended Learning, Moodle, Web 2.0, Corpus-based Data Driven Learning, Multimedia Materials, PowerPoint, m-Learning, Digital Storytelling などであった。

インドネシア大学視察

我々は、大会初日のワークショップには参加せず、当初の計画通り、膨大な広さを誇るインドネシア大学 (University of Indonesia) Depok Campus 視察に午後出かけた。当初連絡をしていた関係者 (Junaidi 氏) から直前の確認メールに返事がなく、心配されたが、指示された待合い場所へ向い、視察を実行した。少し雨模様の天気であり、タクシーでの移動が一番安心でき、容易だったため、利用したが、交通渋滞のため、大学まで約 1 時間半かかった。学術国際交流部門の Junaidi 氏に合う予定であったが、授業中ということで、国際交流授業部門のスタッフに連絡をお願いし、講義が終わり次第合う手配をして、英語のできる関係者に情報機器類のある施設を中心にキャンパスの案内をしてもらった。その後、

改装中の大学管理棟の中にある会議室で Junaidi 氏と他 2 名と約 1 時間半にわたり会合を持った。(写真 5 参照)



写真 5: インドネシア大学スタッフと筆者たち

インドネシア大学での情報通信システム環境、英語教育プログラム、国際交流活動について情報交換をした。まだインフラの整備は遅れており、大学構内でも限られたコンピュータの数と場所でのインターネット接続サービスであることや、個々の学生が自宅から接続して e-Learning システムを利用して容易に学習できる状況にはなっていないことが分かった。コンピュータ施設環境については、以下の写真でも明白なように、まだ不十分であることが分かった。コンピュータ・ラボでは自由に使えるとはいえ、一時間待ちで一時間の使用限定で対応しているとのことであった。(写真 6-7 を参照) 少し裕福な学生たちは、自己所有のラップトップを持ち込み、HotSpot というサインのある付近で、ワイヤレス接続でインターネットを利用していた。(写真 8-9 を参照)



写真 6: コンピュータ・ラボ利用を待つ学生たち



写真 7: コンピュータ・ラボ



写真 8: ワイヤレス接続可能場所サイン



写真 9: ワイヤレスで接続中の様子

写真 8: ワイヤレス接続可能場所サイン 写真 9: ワイヤレスで接続中の様子

初めての旅行先で、しかも短期間滞在での慌ただしい大会参加であったが、有意義な交流ができたと言えよう。今後アジアを中心に更なる学術的な国際活動交流ができればと願う次第である。

最後に、今回の G1oCALL2008 という国際学会への参加に、CIEC 国際活動委員会と外国語教育研究部会から多大なご支援をいただき、お礼を申し上げます。

CIECからのお知らせ

《CIEC第79回研究会開催案内》

テーマ 「クレイアニメーション制作と自立協調学習」

■日時 2009年1月30日(金) 13:00-15:30
 ■会場 八王子市立由木中央小学校
 〒192-0372東京都八王子市下柚木25番地

■開催趣旨

CIEC小中高部会ではこれまでコンピュータを活用した初等中等教育に関してその実践やその研究について議論や体験する機会を設定してきました。実際の授業実践の方法については、2008年6月に京都女子高等学校を会場に実施した第75回研究会「なぜ協調自律学習は必要か」では、ワークショップという形態で実際の授業を参加者に体験していただきいただきましたが、今回はその研究会の結果を受けて、子どもたちに対する授業実践を見学していただくとともに、その授業についての意見をいただき様々な議論をするきっかけとしていきたいと考え、このような企画をいたしました。

この公開授業は、2008年6月2日の朝日新聞の「花まる先生」でも大きく取り上げられ、過去のPCCでも様々な実践研究について発表していただいている八王子市立由木中央小学校の尾池先生の「クレイアニメーション制作」の小学校の児童の実践を小学校の協力を得て実現したものです。皆様のご参加をお待ちしております。

参考：<http://www.asahi.com/edu/student/teacher/TKY200806010080.html>

■プログラム

13:00 - 13:30 受付
 13:40 - 14:25 公開授業
 尾池佳子 氏(八王子市立由木中央小学校)
 14:30 - 15:30 研究協議

■参加費無料

※小中高の授業実践に関心のある方は、どなたでもご参加いただけます。

《CIEC第80回(北海道支部第3回)研究会開催案内》

テーマ 禁止するだけで子どもを守るか
 ～ケータイに真正面から向き合おう～

○日時 2009年2月21日(土) 13:00-
 ○会場 北海道情報大学 札幌サテライト
 (札幌市中央区北3西7緑苑びる4F)

《CIEC第81回研究会開催案内》

テーマ ウェブログを活用した外国語学習の研究と実践

○日時 2009年3月28日(土) 13:00-17:00
 ○会場 大学生協会館
 (東京都杉並区和田3-30-22)

研究会のお申し込み・お問い合わせは

CIEC事務局 e-mail sanka@ciec.or.jp
 TEL/FAX 03-5307-1195/03-5307-1180
 Webサイトでもご案内しております。
 URL <http://www.ciec.or.jp/>

《会誌投稿募集》

CIEC会誌『コンピュータ&エデュケーション』Vol.26
 (2009年6月1日発行予定)

◎締め切り 2009年2月20日
 ◎問い合わせ先 CIEC 会誌編集委員会事務局
 ◎送付先 〒166-8532
 東京都杉並区和田3丁目30番22号大学生協会館
 CIEC 会誌編集委員会事務局
 TEL 03-5307-1195
 e-mail : edit@ciec.or.jp



《CIEC 活動日誌》

2008.10. 17(土)	CIEC第77回研究会(大分大学共催)
19(日)	会誌編集委員会
26(日)	小中高部会ネット世話人会(4地点)
11. 7(金)	GloCALL2008国際大会 7~9日
8(土)	ジャカルタ
9(日)	
15(土)	PCカンファレンス北海道2008
16(日)	室蘭工業大学
22(土)	第2回小中高部会学習会(杉並) 2008九州PCC(佐賀大学) 23~24日 }
23(日)	2008九州PCC(佐賀大学)
26(水)	生協職員部会世話人会
29(土)	会長副会長引継ぎ会
30(日)	三役会議
12. 7(日)	2009PCC第1回実行委員会(愛媛大学)
13(土)	CIEC第78回研究会(アップル本社)
19(金)	CIECタイピングクラブ説明会
21(日)	2008年度第1回運営委員会